

氏名	李 菲菲
ヨミガナ	リ フェイフェイ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第698号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	（論文） 儂の進行態 — はかなく移り行くもの — （作品） 儂の物語

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	篠田 太郎
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	西村 雄輔
（副査）	東京藝術大学	名誉教授	（美術学部）	O J U N

（論文内容の要旨）

本論文が研究テーマとするのは、「消滅、虚無」の臨界に近づきつつある状態についてであり、筆者はこれを「儂の進行態」と命名する。「儂（はかない）」とは、消える直前の状態を指し、それへの心情を表す。これは散る桜を見た時に、花の美しさと同時に、無常と変化（図1）に美を感じるのと同じである。筆者は中国瀋陽で生まれ育ち、教育を受けた。その間、故郷では国営重工業の企業改革と大規模な撤去工事が行われ、父が経営していた会社や筆者の家、通った小・中・高校・大学の校舎も次々に撤去されていった。筆者が生きた空間と育った形跡は消え、消失への恐怖と無力感が、まるでウィルスのように筆者の思考に根付いてしまった。

本論文は、そうした消えゆくものの状態を「儂の進行態」とし、蠟を素材に、建築を形態のモチーフとして、その視覚化と表現化を試みている筆者の創作論である。そこには消えゆくものへの哀惜だけでなく、それが何か別のものへと転化し、見た目は違っても新たな物語がそこから始まってほしいと願う、筆者の願望でもある。

本論文は、全3章で構成される。

第1章『儂の進行態』-ことば、モチーフ、素材では、「消滅した原風景」「建築-モチーフ」「蠟-素材」という3節から、「儂の進行態」を解説する。まず第1節では、“儂”と“無常”について説明し、故郷の鉄西区で実際に起こった事例をもとに「儂の進行態」を説明する。第2節では、“場”と“記憶の器”としての建築を、筆者が「儂の進行態」の具体的なモチーフとしていることを述べる。第3節では、その表現素材として、固体と液体の間で状態変化する“蠟”を使用するに至った経緯について述べる。

第2章『儂の進行態』の作品化では、筆者と近似するコンセプトを作品化した事例について解説する。まず第1節では、そうした作品事例を、“標本・残骸”“廃墟・塵埃”“クイックモーション・スローモーション”“無用”“時間・記憶”“可能性・再生”に分類して紹介する。第2節では、筆者の「儂の進行態」の作品表現を、3種類に分けて解説する。第1に、自作品の「消滅した風景」から「蠟・五重塔」への展開。第2に、蠟を素材とする「ガラス・無常の川」から「蠟・足のない鳥」への展開。第3に、博士課程（後期）入学後、「儂の進行態」に消失へのプロセスだけでなく、その先の新たな可能性を探り始めた段階である。

第3章「新たな種の誕生-提出作品『儂の物語』」では、博士審査展の提出作品について解説する。消失に向かう「儂の進行態」は、消失後に無に帰すわけではなく、新たな別の形に転化、継承されること。そのくり返しとして過去から現在があり、おそらく未来もあることを、“新たな種の誕生”として考察する。終章では、本論文のまとめと今後の展望について述べる。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、消え入る直前の状態に自身の制作のリアリティとモチベーションを感じる筆者が、蠟を素材、建築をモチーフとする現在の作品にいたる表現と展開について述べた創作論である。

中国の瀋陽に生まれ育った筆者にとって、工業地域の鉄西区に集約される繁栄から衰退への激変は、自ら学んだ小学・中学・高校も今はない生活環境の激変を伴うものだったようだ。自身の人生の足跡が消えていく不安、力まかせの社会変化が個人の歴史と記憶のみこんでいく無力感。建築は彼女にとってかつてあった、しかし今はない「儂」の象徴としてあり、固体から液体あるいは気体(燃焼)へと状態変化する蠟は、「進行態」の象徴としてある。

第1章『『儂の進行態』—ことば、モチーフ、素材』では、そうした瀋陽の変化、そこでの自身の変化、そして居場所を失った筆者が来日後、心の空白を埋めるように表現を模索し、建築のモチーフ、蠟の素材にたどり着くまでを論じている。蠟は燃焼ではなく加熱して少しずつ溶解させる方法をとるため、微妙な調整が必要になるが、筆者は蠟という素材の敏感さに、自身の表現素材としての魅力を見い出している。

第2章『『儂の進行態』の作品化』では、筆者の「儂」と「進行態」のイメージを、どのように表現化するのかについて述べる。第1節では、表現やコンセプトに自身と重なる部分があると感じる他の作家をとりあげ、ダミアン・ハースト、徐泳、展望、ウルフ・フィッシャー、劉小東、宮永愛子、ヨゼフ・ボイスらの作品について解説。第2節では、筆者自身の試行錯誤として、瓦や紙、ガラスから蠟にたどり着くまでの素材探索と、ピラミッドや川から蠟素材が溶ける五重塔にたどり着くまでのモチーフ探索、そしてそれらが「儂の進行態」として収斂していく経緯を述べている。

第3節「新たな種の誕生 — 提出作品『儂の物語』」では、美しい翡翠色の蠟の五重塔が、博士展期間中にゆっくりと溶けていく提出作品について解説している。「儂」の行先に消滅ではなく永続や新たな種の誕生を示唆する作品となったことは、表現の深化を窺わせた。

論文作成と進行は困難を極めた。大学院進学後、指導教員が定年や退任で相次いで変わったことも、筆者の試行錯誤が長びく一因となったように見える。幸い最終的に完成にこぎつけたことで、学位に十分な論考として認められた。

(作品審査結果の要旨)

李 菲菲の研究テーマは、「消滅、虚無」の臨界に近づきつつある状態についてであり、李はこれを「儂の進行態」と呼ぶ。

博士審査作品「儂の物語」はその「儂の進行態」、ものの消える状態へ向かっていく様を蠟を用いて示す作品であった。形態として選ばれた五重塔は、思想であり、伝統文化の象徴であり、信仰をも示す。蠟で作られた五重塔は、置かれた台からヒーターで熱せられ融けていく。蠟には翡翠を思わせる色が付けられており、その色はまた、氷河の氷の深い部分を想起させる。それが土台からゆっくり融けていく様は、太陽にあたって上方から融けていくのとはまた異なる儂さの状況を見せた。またその五重塔は中国のものでも日本のものでなく、本人の心の中にのみ存在するものとして制作され、それを融かすことで自我を溶かすことが意識されていた。中国から日本に留学し、経験した文化の異なりや社会的立場の変化など、李自身が切実に重ね乗り越えて来た経験を象徴するものとも言えよう。ただ融けてしまうのではなく、その後「新たな何ものかに生まれ変わる可能性」が重要とされているのである。新たな状況下で自らが融かされ、その環境との融合を試み努力することで人間として新たなステージに立つ。そしてそれが他者にどのように見られるべきか考え留意したことが精密さを追求することであった。精密な細部が融けて輪郭が無くなる変化に、ある種劇的な儂さを強調させ、そこから新たな未来が誕生することが予期される。自らの文化的背景と変化に真摯に向き合い、過去を融かし新しい未来への種が生まれる様を示しつつ今後も思考されさらに深化するだろう李の作品は、課程博士学位に相応しいものとして高く評価する。

(総合審査結果の要旨)

本学生は諸行無常をテーマに研究生時代から研究を深めてまいりました。主査が退任により、私を含め3人の別々な指導方針の中、努力を重ね最終審査にて副査の先生方を含め及第点に達したとの判断を下せるレベルに到達したと判断いたします。無常という概念を、中国の勃興を体験する中で都市開発やそれに伴う都市構造の刷新と労働環境の変化等を観察し、それを論文、作品共に表現に結びつけようとする試みを重ねてまいりました。研究の序盤に於いて、瓦をモチーフとし、瓦でオブジェクトを解体、再構築等を試み、また論文も瓦から感じる”刹那”をテーマとするものでした。論文の方はメインに佐藤先生が担当され、厳しく指導して頂き、主査の自分も論文、作品共に厳しく問題点を指摘し本人の努力によって徐々に問題点が解決される傾向を見るのが出来ました。

最終的な論文は題名を”儂の進行態—はかなく移りゆくもの”とし作品の題名を”儂の物語”と言うものを提出しております。論文の要旨は中国の自身が育った環境の産業や土木、建築が移り行く様をリサーチに基づき、また三島の金閣寺等を参考文献として”儂”とはどういった構造を持っているものかを論じております。

作品に於いては試行錯誤を繰り返し、蠟を用いた彫刻作品を制作しております。作品は”儂さ”が丁寧に表現できるような五重塔をモチーフとした模型を制作し、その模型が台座に仕込まれた熱源によって徐々に溶解してく姿から”儂さ”を表現に置き換える工夫をしました。この蠟の模型には色々な工夫が施されており、精巧なだけではなく、実験を繰り返し”玉”(翡翠)を連想させる質感をともっており、また蠟の融点も計算通りの溶解がされるように各種部位での選択を要所要所に変更する工夫が施されており、結果として美しい状態での溶解が鑑賞者の目前で展示されるよう設計されております。このような高度な展示は素材のリサーチと多くの実験を経て初めて可能となったものであり、その努力が結果に繋がったことと、論文内容の質を以って博士取得の条件を満たしたとの判断に至りました。